

富士山

一名富士

觀世小次郎作

季は地は後前
シテツレ
同じく
シテワキ
海人女唐人
富士の山靈

「倭唐吹く風の。く。音や雲路に通ふらん。

「是は唐せうめい王に仕へ奉るせうけいと申す士卒たり。さても我日本に渡り。此土の有様を見るに。

山海草木土壤までも。さながら仙郷かと見えて。誠に神國の姿を顕はせり。昔し唐の方士といひしもの。日本に渡り駿河の国富士山にいたり。不死の薬を求め得たるためしあり。われも其遺跡を尋ね。只今駿河の国富士山に赴き候。

「唐の。空は雲井に隔て来て。く。東の国に至りても。猶東路の末遠き。海山かけてはるぐと。日数重ねて行く程に。名にのみ聞きし富士の嶺や。裾野に早く着きにけり。く。

「日を重ねて急ぎ候ふ程に。是は早富士の裾野に着きて候。御覧候へ唐にて聞き及びしよりも。猶いやまさりて目を驚かしたる山の氣色にて候ふものかな。又あれを見れば海士と思しき女のあまた来

り候。彼者を相待ち。事の子細をも尋ねばやと存じ候。

シテ、ツレ次第

「砂長ずる山河や。く。富士の鳴沢なるらん。

シテサシ
「朝日さす高根の深雪空晴れて。野は夕立の富士おろし。

三人
「雲もおり立つ田子の浦に。船さしとめて海人乙女の。通ひ馴れたる磯の浪の。よるべ何くと定むらん。實に心なき海士なれども。所からとて面白さよ。松風の音信のみに身を知るや。住む蘆の屋の窓の雨。く。打ち寄する。駿河の海は名のみにて。く。浪静かなる朝なぎに。雲は浮島が原なれど。風は夏野の深みどり。湖水にうつる雪までも。妙なる山の御影かな。く。

ワキ詞
「いかに是なる人々に尋ね申すべき事の候。

シテ詞
「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。

ワキ
「むかし唐の方士と云ひしもの。此富士山に至り。

不死の薬を求め得たる例あり。我も其遺跡を尋ねて。是まで來りたり。其遺跡を知り給へりや。

シテ「げにくさる事の有りしなり。昔し鶯の卵化して小女と成りしを。時の帝の皇后に召されしに。時至りけるか天にあがり給ひし時。かたみの鏡に不死の薬を添へて置き給ひしを。後日に富士の嶽にして。其薬を焼きしより。富士の煙は立ちしなり。ツレ「然れば本号は不死山なりしを。郡の名に寄せて。

富士の山とは申すなり。是れ蓬萊の仙郷たり。

ワキ「さては此山仙郷なるべし。先づ目前の有様にも。今は水無月上旬なるに。雪まだ見えて白妙なり。これは如何なる事やらん。

シテ「さればこそ我朝にても不審多し。然れば日本の歌仙の歌に。時知らぬ山は富士の嶺いつとてか。鹿の子まだらに雪の降るらん。是れ三伏の夏の歌なり。

ワキ

「げにく見聞くに謂れあり。時に当りて水無月なるに。さながら富士は雪山なれば。時知らぬとは理りかな。

シテ

「殊更今の詠めの氣色。波もゆるがぬ四つの時。

ワキ

「暑き空にも雪見えて。

シテ

「さながら一季に。

ワキ

「夏。

シテ

「冬を。

地
「三保の松原田子の浦。く。何れも青水無月なるに。高嶺は白き富士の雪を。実にも時知らぬ。山とよみしも理りや。實にや天地の。開けし時よ神さびて。高くたふとき駿河の富士。實にも妙なる山とかや。く。

クリ地

「抑も此富士山と申すは。月氏しちだふの大山。天竺より飛び来る故に。即ち新山となづけたり。頂上は八葉にして。内に満池を湛へたり。

シテサシ

地

「神仙人気の境界として。四季をりくを一時に顯はし。天地陰陽の通道として。希代の靈験他に異なり。

クセ
「凡そ富士の嶺は。年に高さや増るらん。消えぬが上に積る雪の。見れば異山の。高嶺々々を伝ひ来て。富士の裾野にかかる雲の。上は晴れて青山たり。何くより降るやらん。雲より上の白雪は。然れば此山は。仙郷の隠れ里の。人間に異なる其

瑞験もまのあたり。竹林のおほひとして。皇女に備はりて。鏡に不死薬を添へつゝ。別るゝ天の羽衣の。雲路に立ち歸つて。神と成り給へり。

シテ
「帝その後。かくや姫の教へに随つて。

地
「富士の高嶺の上にして。不死の薬を焼き給へば。煙は満天に立ち登つて。雲霞逆風に薰じつゝ。日月星宿もさながら。あらぬ光りをなすとかや。さてこそ唐の方士も。此山に登り不死薬を。求め得

て帰るなり。これ我朝の名のみかは。西天唐土扶桑にも。ならぶ山なしと名を得たる。富士山の粧ひ。誠に上なかりけり。

ワキ詞
「富士山の謂れば承り候ひぬ。さてくあれに見えたる山は。いかなる山と申すやらん。

シテ詞
「あれは足高山とて。富士にならべる高山にて。金胎両部をあらはせり。これ足高の神前なり。

ワキ
「さてく浅間大菩薩とは。取り分き何れの神やらん。

シテ
「あう浅間大菩薩とは。さのみは何と優女の姿。

地
「恥かしやいつかさて。く。其神体を顯はして。

誰にか見えけん神の名を。さのみに顯はさば浅間の。あさまにやなりなん。不死の薬はあたふべし。しばらくこゝに待てしばし。芝山の雲と成つて。立ち登る富士の嶺の。行方知らずなりにけり。

く。
(中入)

地「かりければ富士の御嶽の雲晴れて。金色の光天地に満ちて。明方の空は明々たり。

後ジテ「抑も是は富士山に住んで悪魔を払ひ国土を守る。火の御子とはわが事なり。こゝに漢朝の勅使此所に來り。不死の薬を求む。其志深き故。不老不死の仙薬を。即ち彼にあたふべしと。

地「神託あらたに聞えしかば。く。虚空に音楽聞えつゝ。姿も妙なるかくや姫の。薬を勅使にあたへ給ふ。有難や。笙笛琴箜篌孤雲の御声。く。誠なるかな富士浅間の。唯今の影向。実にも妙なる有様かな。

シテ「夫れ我朝は。栗散辺地の小国なれども。

地「栗散辺地の小国なれども。靈神威光を顯はし給ひ。悪魔を退け衆生を守る。中に殊なる富士の御嶽は。金胎両部の形を顯はし。まのあたりなる仙郷なれば。不老不死の薬を求め。勅使は二神に御

暇申し。漢朝さして帰りければ。かくや姫は紫雲
に乗じて。富士の高嶺にあがらせ給ひ。内院に入
らせおはしませば。猶照りそふや火の御子の。姿
は雲井によぢのぼり。姿は雲井によぢ登つて。虛
空に上らせ給ひけり。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈 第六輯」大和田建樹著